

所属番号 8	所属名 愛知	東郷町立音貝小学校	ホ ッ タ ア ツ シ 名前 堀 田 敦 嗣
分科会番号	特	分科会名	「特別の教科 道徳」特別分科会

研究題目 自己の生き方についての考えを深めることができる児童の育成
 ～道徳科における学習を意識した発問や学習活動の分類、学習展開の工夫の模索～

研究要項

1 主題設定の理由

中央教育審議会教育課程部会道徳ワーキンググループ（以下、中教審道徳 WG とする）では道徳教育に関する現状と検討課題として、「道徳教育について、61%の教育委員会が「教師の指導力」を課題に挙げている。授業の中で、異なる意見や価値観をもつ他者との議論を通じて多面的・多角的に考え、道徳的価値について議論を深めるところまで至っていない事例が散見される」との指摘がある。道徳部会に所属している私は、教研活動で他の先生の発問アイデアや授業案に触れることで、自身の指導力不足を感じてきた。初任者の頃、教科書や指導書通りの授業を進めていた私は、道徳部会で実際の題材をもとに授業案検討を重ねる中で、子どもを惹きつける導入の工夫や児童が「考えたい！」と思うような魅力的な発問づくりについて触れてきたが、いざ実践しようとしてみると、「考えたい！」という意欲を引き出せなかった。どのような発問や展開にすると児童がこれまでの体験や経験を想起して考え、異なる意見や価値観をもつ他者との議論を通じて多面的・多角的に考え、道徳的価値について議論を深めることができるのだろうか悩んでいた。

また、中教審道徳 WG では、「A I 時代に『人間として生きること』や『価値判断と責任』がとりわけ重要となる中で、自己を見つめ、生き方についての考えを深める道徳教育が一層重要になっている」とされている。A I 時代と表現される程に、私たちの身の回りにはさまざまな A I が存在しており、それらを適切に使うことができずにトラブルになってしまう事例も少なくない。このような時代だからこそ、内容項目「A 主として自分自身に関すること」の自己の生き方について考えを深める学習を充実させることが重要であるといえる。昨年度の道徳部会の研究レポートより、内容項目 A の題材は自己との距離が近く自分事として考えやすいことが分かっている。そのため、自己の生き方についての考えを深める学習に重点を置きやすいと考え、本研究では内容項目 A の題材を扱うことにした。

本年度、私は 1 年生を担当している。昨年度担当した 6 年生との発達段階の違いに戸惑うことがあり、自己の生き方についての考えを深められていないように感じていた。学習指導要領解説の「道徳科の内容」では、同じ内容項目でも低学年、中学年、高学年で指導の要点に違いがあったが、自己の生き方についての考えを深める共通した学習展開があるのではないかと考えた。

以上のことから、内容項目「A 主として自分自身に関すること」の題材において、児童が体験や経験を想起し、これまでやこれからの生き方について考えたり実際に行動したりするなど、自己の生き方についての考えを深められるようにしたいと考え、本研究の主題を設定した。

2 研究の仮説と手だて

(1) 研究の仮説

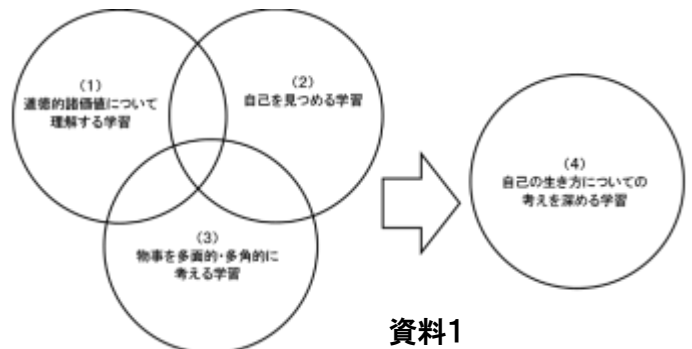
各学年の指導の要点を意識して授業終末における児童の姿を考えたり、発問を分類し展開を工夫したりすることで、児童は体験や経験を想起し、これまでやこれからの生き方について考えたり実際に行動したりするようになり、自己の生き方についての考えを深めることができるだろう。

(2) 研究の手だて

手だて① 児童が道徳的価値を自分事として捉えやすくなるように、各学年の指導の要点を意識して授業終末における児童の姿を考え、授業づくりを行う。

手だて② 児童が道徳的価値を自分事として捉えやすくなるように※4つの学習を意識して発問や学習活動を分類し、展開を工夫する。

※ 学習指導要領解説では、道徳科における学習として、「(1) 道徳的諸価値について理解する学習」、「(2) 自己を見つめる学習」、「(3) 物事を多面的・多角的に考える学習」、「(4) 自己の生き方についての考えを深める学習」があるとしている。教師の発問や児童の学習活動が4つのどれに該当するか分類し、資料1のように(1)(2)(3)の学習を経て、(4)の学習を進めていく。

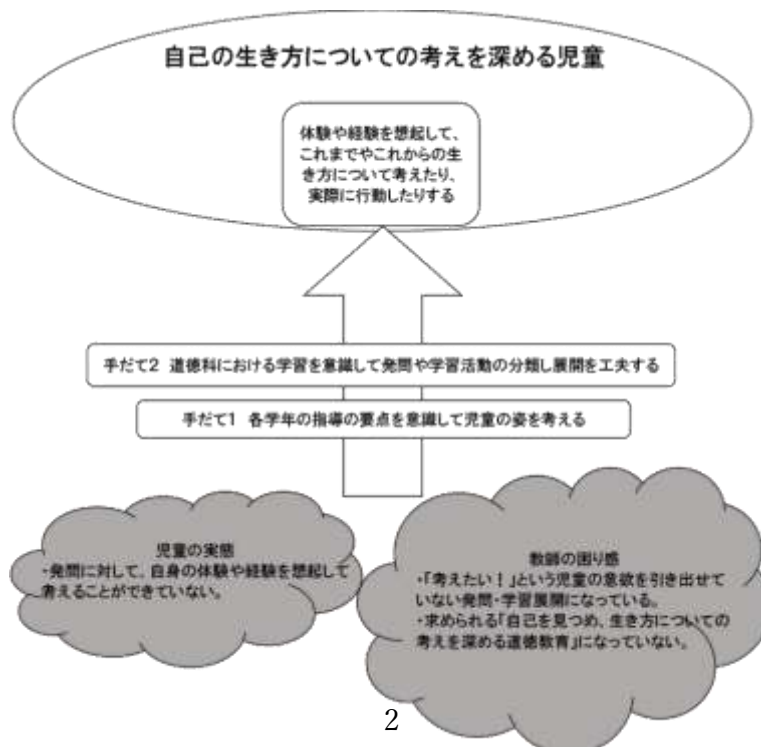


3 めざす児童像

自身の体験や経験を想起し、これまでやこれからの生き方について考えたり実際に行動したりするなど、自己の生き方についての考えを深めることができる児童

4 研究の方法・計画

(1) 研究構想図



(2) 対象児童

小学1年生 26名（男子15名、女子11名）

小学3年生 32名（男子11名、女子21名）

小学6年生 34名（男子16名、女子18名）

(3) 検証の方法

① 授業内の児童の様子

授業の様子を撮影し授業内の児童の様子から、体験や経験を想起し、これまでやこれからの生き方について考えているか検証する。

② 児童の記述

記述の中で体験や経験を想起し、これまでやこれからの生き方について考えているか検証する。

5 研究の実際

(1) 実践1（小学1年生）

「きんのおの」

内容項目	A 正直、誠実	主題名	しょうじきなところで
------	---------	-----	------------

本主題は正直でいることの大切さについて考え、うそやごまかしをせず、素直に伸び伸びと生活しようとする心情を育む内容である。第1学年及び第2学年の指導の要点では、うそやごまかしをしないで明るく楽しく生活することの大切さを押さえておくとされている。そのため、授業終末の児童の姿を「正直でいることの大切さに気付く、明るく楽しい気持ちで生活できるようにこれからも正直な自分でいようとする」とし、本時の課題を「正直でいると、どんなよいことがあるのか」とした。

授業の導入として、物語の挿絵を拡大表示し、内容を想像させた後に範読した。児童は興味をもって話を聞いていた。続けて、「初めの木こりはどうして正直に答えたのか」（1）と発問した。児童は「嘘をつくのはだめだから」や「正直に言わなければいけないから」と答えており、多くの児童が「正直」の意味を理解しており、正直であることが当然のように捉えていた。

次に、挿絵の中の、正直な木こりと嘘をついた木こりの両方と接した神様の表情に注目させて、「神様はどんな表情しているか」と発問した。児童は初めの木こりに対しては「にっこりしている」、嘘をついた木こりに対しては「残念な顔」、「がっかりしている」と答えた。続けて、「どうして表情が変わったのか」（3）と発問した。児童は「正直に言ったから（にっこりした）」、「褒めているから（にっこりした）」や「嘘をつかれたから（がっかりした）」、「金の斧をもらおうとしているから（がっかりした）」と答えた。その後、授業先日に行った事前アンケートの結果を紹介した。アンケートでは、「これまでに嘘をついたことはあるか」（2）、「嘘をついたときはどんな気持ちになるか」（2）と自身の体験や経験を想起させる内容を尋ね、26名中7名が「嘘をついたことがある」と回答した。「嘘をついたときはどんな気持ちになるか」の問いには、「嫌な気持ち」や「悲しい気持ち」、「ちょっとだけごめんねと思った」という回答があった。授業では、嘘をついたことがある人がいることとその時の気持ちを紹介し、嘘をつくことで自分自身がよい気持ちにはならないことを全体で確認した。その後、本時の課題である「正直でいるとどんなよいことがあるのか」（3）と発問した。児童からは、「自分がいい気持ちになる」や「みんなに信じてもらえる」といった、正直でいる自分自身の視点と周りの人の視点から、正直でいることのよさについて考えることができていた。授業終末に、「今日の授業で大事だと思ったことは何か」（4）と尋ねると、児童は、「正直でいることが大事」、「嘘をつく悪い気持ちになる」と答

えた。発言した児童に「これからはどうしていききたいか」(4)と尋ねると、「正直でいたい」と答えた。

(2) 実践2 (小学3年生)

「よごれた絵」

内容項目	A 正直、誠実	主題名	正直にあやまる心
------	---------	-----	----------

本主題は心から謝ることのよさについて考え、過ちを犯したときにはごまかさずに素直に反省し、正直に明るい心で過ごそうとする判断力を育む内容である。第3学年及び第4学年の指導の要点では、他者に対してうそを言ったりごまかしたりすることが自分自身をも偽ることにつながることに気付かせたうえで、正直であることの快適さを自覚できるようにし、過ちを犯したときには素直に反省し、そのことを正直に伝えて改めようとする気持ちを育むことが大切だとされている。そのため、授業終末の児童の姿を「正直にいることには勇気がいるが、正直だと自分も相手も気持ちよく生活できる」とし、本時の課題を「正直にいることのよさって何だろう？」とした。

授業の導入として、物語の一文目の「わざとやったわけじゃないんだ」に続く展開を考えさせた後に範読した。児童は、限られた情報からどのような内容かを想像しながら範読を聞いていた。

物語の途中、主人公が正直に謝るか、何事もなかったかのようにするか葛藤する場面で範読を中断し、「この後どうしたと思うか」(2)と発問した。「謝るんじゃないかな」と反応する児童と、「隠してしまうんじゃないか」と反応する児童とで学級が二分された。主人公がこの後どうしたと思うかを尋ねたが、「自分だったら隠しちゃう」と主人公と自分を重ね、自分事として反応する児童もいた。物語の続きで、主人公は何事もなかったかのように振舞ってしまったことを伝え、「主人公に共感できるか」

(2)と尋ねた。この発問でも学級が二分された。児童の中には「自分も隠しちゃったことがあるから共感できる」と自身の体験や経験を想起して判断している姿が見られた。

次に、物語を最後まで範読し、「主人公はどうして謝ったのか」(3)と発問した。児童は「もし自分がされたら、黙ってられないから」や「作者が一生懸命描いた絵を汚してしまったら」と答えていた。

正直に謝り、許してもらった主人公について、「主人公は許してもらえたが、もしみんなが絵の作者なら許せるか」(3)と発問すると、「許せない」と反応する児童が学級の4分の3程度いた。続けて「では、正直に謝らないほうがよかったのか」(3)と尋ねると、「正直に謝った方がよい」と答える児童がほとんどだった。それを踏まえて、本時の課題である「正直にいることのよさって何だろう？」(3)と発問した。「モヤモヤがなくなる」、「黙っていたら許してくれないけど、正直に言ったら許してもらえるかもしれない」などの自分から見たよさや、「分かってもらえたり信じてもらえたりする可能性がある」、「周りの人からのイメージがよくなる」などの他者から見たよさについて答える児童がいた。

授業終末に、「今日の振り返りを書こう」(4)と指示すると、「これからは怒られたくないけど、正直に言う」、「嘘をつかずに正直にすることが大切だと改めて思った」などの記述があった。

(3) 実践3 (小学6年生)

「手品師」

内容項目	A 正直、誠実	主題名	自分の心に誠実に
------	---------	-----	----------

本主題は「誠実に生きる」とはどのようなことかを考え、自分自身に誠実に生き、明るい心で過ごそうとする心情を育む内容である。第5学年及び第6学年の指導の要点では、自分自身に誠実に生きようとする気持ちが外に向けても発揮されることがより明るい心となって行動にも表れ、自己を向上させる

ことや自信にもつながっていくとされている。そのため、授業終末の児童の姿を「誠実に生きることの難しさを受け止めながら、明るく生活したり自信をもって過ごしたりするために誠実に生きようとする」とし、本時の課題を「誠実に生きるために自分が大切にしたいことは？」とした。

授業の導入で、事前アンケートの「誠実に生きるとはどういうことか」という問いの回答を共有した。「自分に嘘をつかないで生きること」や「人のために生きること」などと回答した児童もいたが、半数程度の児童が「分からない」と回答していた。その後、この授業内での「誠実に生きる」の意味を「目先の利益よりも、自分が大切にしたいことを優先する」(1)と全体共有し、物語を範読した。

範読の後、「友人の「いい話」を聞きながら、手品師はどんなことを考えていたのか」(3)と発問した。児童からは「男の子の約束と自分の夢と、どっちが大切か悩んでいた」や「大劇場に行けるチャンスに喜んだが、男の子の顔が浮かんできて、男の子との約束を破るわけにはいけないと思った」などと答えた。続けて、大劇場に行くことのよさと、男の子との約束を守ることのよさを確認した。そのうえで、「手品師が男の子の約束を守るときに大切にしたいことは何か」(1)と尋ねた。児童からは「信頼されること」や「男の子の笑顔を守ること」と答えた。

次に、「手品師はどんな思いで男の子の前で手品をしたか。」(3)と発問した。児童は「男の子に手品を見せる選択でよかったなと思った」や「チャンスは失ったけど、男の子を喜ばせることができてよかったなと思った」と答えた。続けて、「誠実に生きるとどんなよいことがあるのか」(3)と尋ねると、「信頼される」、「自分が後悔しない」と答えた。誠実に生きるよさを考えたうえで、「自分の誠実度を0から5で表すとどれか」(2)と発問した。学級の半分以上の児童が0、1、2と答えており、誠実に生きることのよさは分かっているが、目先の利益を優先してしまって誠実に生きることが難しいことを全体共有した。続けて、自分が大切にしたいことがあれば、利益にとらわれず誠実に生きることができると確認し、「誠実に生きるために大切にしたいことは何か」と発問した。児童は「誰かの役に立つこと」や「約束したことを大切にしたい」などと答えていた。「誰かの役に立つこと」と答えた児童は、児童会役員や学級委員などを経験しており、これから大切にしたいことを、体験や経験を想起して考えていた。

6 仮説の検証

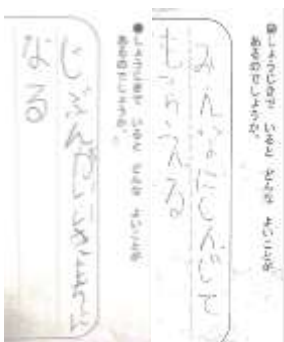
(1) 授業内の児童の様子

実践1、2、3のいずれも授業内で意見交流が活発に行われた。意見交流の中で、「(これから)正直でいたい。」や「正直に生きると明るい気持ちでいられるからこれからも続けたい。」、「誠実に生きるって難しいけど、自分が大切だと思うことを大切にしていきたい。」など、これまでやこれからの生き方について考えている姿が見られた。

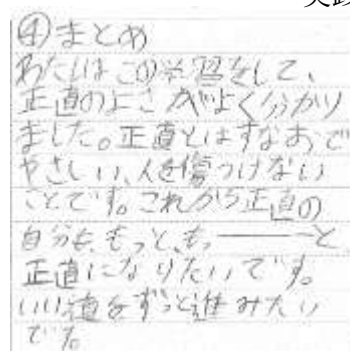
(2) 児童の記述

授業終末の児童の記述には次のようなものがあった。

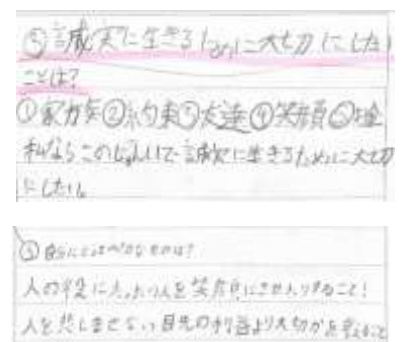
実践1



実践2



実践3



実践1では正直に生きることのよさについて、「自分がいい気持ちになる」や「みんなに信じてもらえる」というように、正直な自分自身から見たよさと相手から見たよさについて、異なる立場から多角的に考えることができています。実践2では、正直の意味を捉えなおしたうえで「これからも正直の自分も、もっとも一っと正直になりたい」という記述や、「なにかしてしまったら正直にごめんなさいを言いたい」という記述、実践3では、「(誠実に生きるために) ①家族②約束③友達…」と順位づけて考えている記述や、「(誠実に生きるために大切にしたいことは、) 人の役に立ったり笑顔にさせたりすること」という記述から、児童はこれからの生き方について考えることができています。

(1) 授業内の児童の様子、(2) 児童の記述から、仮説は立証された。

7 成果と課題

(1) 研究の成果

低学年、中学年、高学年それぞれの指導の要点を意識して授業終末の児童の姿を考えることで、教師が明確なねらいをもって発問や学習展開を考えることができた。これにより、教科書や指導書に頼りきるのではなく、学級の実態に応じた発問をすることができると感じた。発問や学習活動を分類することで、教師が児童の立場から学習を整理することができ、より自然で効果的な学習展開で授業を進めることができた。内容項目A 「正直、誠実」の題材において、手だて②の学習展開にすることで、児童が自身の体験や経験を想起し、これまでやこれからの生き方について考えたり実際に行動したりしており、自己の生き方についての考えを深めることにつながっている。本研究で講じた2つの手だてが自己の生き方についての考えを深めることに有用だったことが分かる。

(2) 研究の課題

本研究では、内容項目A 「正直、誠実」の題材で実践を行った。そのため、別の内容項目の題材でも本研究の手だてが有効であるか、引き続き研究していきたい。特に、A以外の内容項目では、4つの学習の中で中心に置く学習が変わるため、それぞれの内容項目で、より道徳的価値を自分事として捉えやすくなる学習展開を研究していきたい。

手だて①の、各学年の指導の要点を意識した授業終末における児童の姿を考えて授業づくりをするについて、学習指導要領の改訂による指導の要点の内容変更の可能性があるので、改訂後は内容を確認し、新しい指導の要点を意識した授業終末における児童の姿を設定したい。

手だて②の発問や学習活動の分類について、1つの発問や学習活動が複数の学習に該当するものが考えられる。複数考えられるものについては主にどの学習に該当するかで分類したが、今回よりさらに適した分類があるのではないかと感じている。また、手だて②の学習展開の工夫については、(4)の学習までに(1)(2)(3)の全ての学習を進めると、授業時間が圧迫されてしまい、本来時間をかけて行うべき(4)の学習に十分な時間を使えなくなってしまった。本研究では、事前アンケートをすることで時間を確保したが、時間的余裕がない学習展開になりがちである点について、今後の研究でよりよい学習展開を模索していきたい。

参考文献

- ・「中央教育審議会教育課程部会道徳ワーキンググループ（第1回）道徳教育に関する現状・課題と検討事項」
令和7年11月 文部科学省
- ・「小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説 特別の教科 道徳編」
平成29年7月 文部科学省